

# チベット宗教における護法尊について

—黒、白コンポ（MGON PO）一面六臂を中心に—

切 旦

On the guardian gods in religious view  
Focus for the mahakara in black-colour

QIEDAN

## Abstract

Mahakala called Gongboo and one of the main Tibetan Buddhism Guardian Deity. Cause of doctrine, was been divided Sajarl Gongboo, wisdom Gongboo and protector Gongboo gel. In the aspect main analysis from 12 to 17 century doctrine of many wooden prints and here the author uses Tibetan Buddhism virtuous order protector whom created Black Mahakala six arms and White Mahakala six arms of religious successive history God features will be released.

**Keywords:** Tibetan Guardian Gongboo religious successive

## はじめに

本稿ではチベット仏教の護法尊を中心に調べていく。チベット仏經典によると、サーパーリン・ザン時代<sup>1)</sup> (12世紀から17世紀) の木版文献では、マハーカーラ (大黒天のサンスクリット語) の種類が多彩になり、この文献の作者はチベット仏教世界の重要な人物であり、活仏やラマ、カムポなどを論じた多くの貴重な經典が存在した。とある。この經典はインド仏教の伝播と共にチベットボン教に接触し、増加してきたものではないかと思われる。

チベットと日本などの文献資料や図像を見ると、日本、中国、ネパール、モンゴル、チベットなどで同じ名称のマハーカーラでありながら、違った仏像であることがよくある。文化交渉学の視点として分析すると、仏像自体は眼に見えるものばかりから判断するのではなく、仏像の変容、地元で親しまれている図像などの変化、各宗教の儀式、修業、民間文化などの接触により、国、民族とは関係なく、地元の宗教の影響から生まれたものではないかと考える。

今回取り上げたいのはチベットコンポ (大黒天のチベット語) にある五色のコンポから、黒コンポと白コンポの変容と神格について、日本のチベット学者である田中公明氏『チベットの仏たち』や、大島建彦氏『大黒天信仰』、笹間良彦氏『大黒天信仰と俗信』などの論考を比較しながら、チベット版『大蔵經』を中心にサーパーリン・ザン時代の經典を利用し、チベットの二種類のコンポの宗派と神格を伝えて来た人物の伝承と称賛、梵語などについて明らかにしたい。

チベット語の文献については筆者の日本語に訳したものを載せる。重要な称賛部分はチベット語をアルファベットで表す。またチベット語の經典原稿訳は筆者が行う。称賛部分には伝承人物である高僧の灌頂に関する内容が述べられおり、伝承と称賛の特徴は同じ宗派の門流が伝えられているからである。また「吉祥大黒八足讃」と「十方護神讃」、「大黒讃」、「大黒八道讃」の漢文を読み比べてみると、内容が異なった部分があったため、筆者のチベット語原語訳を付した。

### 1. チベットコンポ (MGON PO) とは

大黒とはチベット語でコンポ (mgonpo) と呼ばれ、仏教を「教える」と「守る」という二つの意味が込められている。チベットは高度に発展したインド後期大乘仏教の影響を受けつつ、『金剛頂經』系の密教も発展した。後期密教はツォカ時代<sup>2)</sup> の翻訳者リンチェンサンポ (956-1055)

1) サー時代はギョン・コンチュジャボ氏が1073年にサキヤ寺を建立し、この宗派の門流はサキヤパと言われる。パー時代はネドン県のバジードウジ・ジャボ氏が1158年にテー寺を建立され、この時代はバジーパ時代と言われる。リンとザン時代は1480年から1642までの時代はリンー、ザン時代と言われる。詳細は「サーパーリン・ザン時代史」2008. 5月。163頁～179頁。

2) オウサォー王子 (Aod ungs) の孫タシゼーパ (ngkr shes nregs pa) の子供神子あるいはジュンデン

が初訳したと考えられていた。しかし敦煌からチベット訳『密教集会』の第十七分までの写本が発見されると、リンチェンサンポ氏はチベットとインドの二つの宗教の橋渡しをするような人物であると分かった。チベットのコンポに関する後期密教の文献がリンチェンサンポ氏により訳されたことは『蔵伝仏教神明大全』にも書かれている。つまりチベットコンポの文型初訳にも深い関係があると思われる。そこでサーパーリンーザン時代の經典資料、特に大黒天に関する經典を分析したところ、12世紀～17世紀の僧侶の文献がかなり多いことがわかった。チベットコンポの歴史の背景について、規定的な部分は今のところ見つけられない。しかし取り上げた文献から予想すると、その800年ほどの歴史から、交渉人物になるリンチェンサンポ氏はチベットコンポに関する由来も考えたようである。最初のチベットコンポの源来と効能については以下のように語っている。

發願退失，頭爛千塊，十方仏及衆生做了無數善事，徒兒，善哉。我等為妳作後盾。觀音為衆生做了無數善事，以為完衆生，便於普陀山參禪而住，結果發現世間依旧。如是三次，決定寂滅，誓願廢弛，頭破千塊。諸仏不僅使頭復原，而且加持十壺面。但仍無濟於事。觀音因想濁世衆生多滅多難，壽短病多，應尋找壺個短期內認財兩旺，消除魔障的方法。從心間放出蔚藍色的吽字，從吽字出現六臂智慧怙主（護法神之始），來滿足有情願望。諸仏加持夜叉，閻摩敵，羅刹等也助怙主壺臂之力，共同護法<sup>3)</sup>。

上述の引用は『蔵伝仏教神明大全』のほか『宝源三百図解』にも記載されている。これを見ると、仏教に関する護法尊などの起源は、宗教に対する利他や慈悲を目的にしたものであるとあってよいだろう。

## 2. 黒コンポー一面六臂

チベットギョルー派の護法尊であるコンポの一面六臂種類は五つある。この宗派はチベット仏教の世界では最も重要である。ギョルー派を創始したのはツォンカパ（Tsong khpal 1357-1419）という人物がである。彼はチベットアムドツォカという地域に生まれた文殊菩薩の化身とも言われている。ギョルー派の寺院はチベット地域では最も多い。ここではチベットギョルー派の護法尊、黒コンポー一面六臂の護法尊の図像を中心に追うこととする。

まずここでギョルー派と黒コンポに関する資料の内容を示す。

ギョルー派はチベットでは最も重要な宗派の一つで、戒律の修業中には結婚できず、煙草・酒も禁止である。ギョルーの意味は善道と言われる。ほかにはギャデンパ（dga ldn pa）

---

（Khri lde, 997-1065）年かけてアムドツォンカ地域を支配された時代。

3) 久美卻吉多傑『蔵伝仏教神明大全』漢語版 青海民族出版社、2004年、588頁。

の名称もあり、黄色の帽子をかぶることで黄教ともいう。黒コンポ一面六臂のタンカ（図像）は16世紀から17世紀にかけて発展し、18世紀には東チベット地域にもよくみられる<sup>4)</sup>。

引用より、黒コンポ一面六臂はチベットのギェル派の護法尊であることがわかった。この護法尊については、チベット各寺院の經典資料も多い。そして作者はほとんどがラマや活仏、カムポなどで、厳しい修業のなか灌頂を受けられ、論じたものではないかと思われる。

ここで今現存する銅像一面六臂として最も古い、アメリカルビン美術館の14世紀一面六臂の銅像を下記図像に示す。



図1 14世紀 アメリカルビン美術館蔵  
『世界最美唐卡』  
方丈堂出版、2009年10月、241頁。

アメリカルビン美術館の銅像は14世紀のもので、図像の形によると憤怒尊、一面六臂である。三眼で、頭に五連の鬘髻をつけ、黒蛇のネッレス、右上の手は金剛と真ん中の手にはデンデン太鼓、下は数珠。一番上の左手には喝把碗、真ん中の手には猿に似た物、下の手には金剛紐を持ち、蓮の上にガネーシャを踏みつける。蛇につけた五十の数字の鬘髻、両腕と両足に蛇がそれぞれついている。また頭の上に仏像がある。これは非常に重要な部分である<sup>5)</sup>。

以上の内容をみると、チベット黒コンポ一面六臂の模様とはほぼ一致している。しかし、頭髮の真中の仏像から見ると、チベット黒コンポの仏像ではないかとも考えられる。一番ユニークなのは頭上に仏像があることで、『藏伝仏教神明大全』には黒コンポ一面六臂の頭上に（mi skyod rgyal po）の手印があると述べているが、チベットの図像からは見えにくい。もしくはあえて描かなかったのかを含めて検討する必要がある。今回図は像の様子に着目し、チベットの他の仏像を調べた結果、チベットの雄偉的な七つの仏陀の一つであるという可能性が浮かんた。ここで下記の引用から説明しよう。

中央の釈迦無仁仏の手印は結說法印。東の毘婆屍仏の手印は結鎮印と定心印、北東の屍棄

4) 若布旺典『世界最美唐卡』紫禁城出版社 2009年8月。96頁。

5) 注4 前掲、若布旺典論考 241頁。

仏の手印は結施印と定心印。東南の毘舍浮仏の手印は結施印と定心印。西の俱留孫仏の手印は三摩印。南西の具那含無仁説法定心印。西北の迦棄仏の手印は右手執法衣辺、状如鹿耳<sup>6)</sup>。

筆者はルービン美術館の銅像をもとに、14世紀の黒コンボ一面六臂の頭上にある仏像を中心に七仏（釈迦、毘婆屍、屍棄、毘舍浮、俱留孫仏、具那含、迦棄）を調べ、その頭上の図像と姿、手の形、足などの形を分析した結果、七種類の仏像の六番目、西にある俱留孫仏の手印は三摩印と似ていることから、六番目の仏は俱留孫仏ではないかと考えるが、いまのところ断定はできない。ほかに、チベット如来仏三十五種類にも姿形が一つの仏と一致していたが、体色は白であるため、ほかの資料を調べる必要がある。また、五色（rgyl b rigs lng）の仏像という考えも浮かぶ。

次にギュルー派の護法尊を中心に、灌頂を与えられた二つのコンボの特徴を以下に取り上げていく。

### 3. 黒コンボ一面三眼六臂の神格

黒コンボ一面三眼六臂の神格と手に持つ物、体色、などについては上記の通りであるが、漢訳には『藏伝仏教神明大全』と異なる部分もあったため、漢訳の引用したものを以下に示しつつ、チベットのサーパーリンザーン時代（12世紀-17世紀）の經典についても取り上げていく。

象首，三只慧眼，右手向地藏供奉綠叶，左手飾以顛骨、絲帛及珍宝，臥姿而住。其上為六臂智慧怙主，慧眼怒視，咧嘴呲牙吐舌，須、眉、鬚紅黃卷曲，額塗黃丹圓圈，頭頂不動仏封印；右手執金剛弯刀，左手執滿血顛骨对著心間上下，右中手執顛骨鬘，右下手猛敲鼗鼓，左中手執三股矛，下手執金剛絹索；双脚并立踩压三界，“唵”作響震懾魔王；虎裙束以綠絲帶，頭戴青蛇冠……此尊使修者如願以償<sup>7)</sup>。



図2 久美卻吉多傑『藏伝仏教神明大全』漢語版青海民族出版社、589頁。

智慧と護徳の護法尊として崇敬されるチベットのコンボに、黒コンボ一面三眼六臂の大黒（ngbo chen

6) 久美卻吉多傑『藏伝仏教神明大全』青海民族出版社、2001年、12頁。

7) 注3前掲、久美卻吉多傑論考 589頁。

pao) がある。また黒コンボの姿はチベットで盛んに信仰される。忿怒の相をして三眼を有する。このコンボは黒色で一面三眼六臂の形をしているが、特長としては色の違いだけでなく、コンボが有する力についても述べられている。チベットでは障害を取り除く神の像の形相は忿怒、髪は怒髪である。頭に五連の鬚髻の飾りがあり、右の一番上の手に金剛の刀、左の一番上の手に血まみれの鬚髻を胸の前に合わせるように持つ。二番目の右手には鬚髻の数珠、左手はダマル（デンデン太鼓）を激しく打つ、三番目の右手は三鉗杵、三番の左手には金剛の紐を握る。

チベットのコンボ（大黒）が乗る台座は三種類あり、この黒コンボ一面六臂は、白いガネーシャを踏みつける。このガネーシャも三眼であり、右手に地の中心を表す大根の形のものを持つ。左手には鬚髻の飾りを持つ。寝そべった所を一面三眼六臂コンボ（大黒）に踏まれている。飾りは両足に三世を表す装飾と、虎の皮のスカートと緑金襴のベルトをまとう。頭に青蛇の飾り、赤蛇は耳飾り、派手蛇は腕飾り、白蛇は首飾り、黄蛇は腕飾りであり、憤怒の形である。こ

こで『チベットの仏たち』によると下記のとおりである。



図3 田中公明『チベットの仏たち』  
方丈堂出版、2009年、224頁。

六臂マハーカーラは、眉間に第三眼を現す身色黒色の憤怒形で、ガネーシャの上に展左屈右の姿勢で立ち、背には像の生皮をはおり、右の第一手にカルトリ（曲刀）、左の第一手にカパーラ（鬚髻杯）、左右の第二手は像皮の縁であるとともに、右には鬚髻の数珠、左は三叉戟を持ち、右の第三手はダマル（デンデン鼓のような楽器）、左の第三手は素を持つ一面三六臂です。この図像は『サーダナマラー』にかれる一面三眼六臂像にはほぼ対応しますが、細部においては不一致もみられます<sup>8)</sup>。

ここで田中公明氏の引用と、筆者が調べた部分の違いを挙げる。田中氏は左右の下の手は像皮が縁に描かれたとしているが、『蔵伝仏教神明大全』で描いているのは、左右の上の手に持っているのは鬚髻の数珠と三叉戟であることが確定できる。ここで手の持つ物像皮について、チベット仏教の第二人物者、テンペニマ僧の經典資料と比較しながら田中公明氏が利用した『三百図像集』の図像の解釈を分析する。次に挙げるのは『イダム修業の宝源』という經典の一部

8) 田中公明『チベットの仏たち』方丈堂出版、2009年

ここでは田中氏は真ん中の手を第一手、左右の上の手を第二手、左右の下の手を第三手としている。

である。

金剛の刀と、一番左手に血まみれの髑髏を持つ、右の二番目の手に髑髏の数珠。三番目はデンデン太鼓、二番の右の手に三鈷杵を持ち、二番の左には金剛の紐を握る。両足に三世を表す装飾と、虎の皮のスカートと緑金襴のベルトをまとう。頭に青蛇の飾り、赤蛇は耳飾り、派手な蛇は腕飾り、白蛇は首飾り、黄蛇は腕飾りであり、憤怒の形である。頭に五連の髑髏の飾りがあり、血まみれの五十の髑髏が璽珞として飾ってある。六つの髑髏の飾りがあり、口からは恐ろしい龍の音のような声をだす、障害に打ち勝つ。また炎の中に存在する<sup>9)</sup>。

この經典はテンペニマ（1782-1853）のパチンパ7世の活仏であり、内容は『藏伝仏教教神明大全』及び『藏伝仏教教神明大全漢訳』の説明図とほぼ同じである。ここでは、チベット『藏伝仏教教神明大全』の説は經典の内容と一致する。その結果、手の形の順番が規定的であったことがわかった。胸に併せた手で下を向いている手が一番目であり、数珠と三鈷杵を激しく取り上げた手は二番目である。真ん中の二本の手は一番下だった事が文献の分析の結果同じであることが分かった。そのほかに「左右の第二手は像皮の縁とともに、右には髑髏の数珠、左は三叉戟を持ち、右の第三手はダマル（デンデン太鼓のような楽器）、左の第三手は素を持つ一面三眼六臂です。」第二手は像皮の縁とともにと部分を『三百図像集』の図像と調べていくと、『チベットの仏たち』の一面三眼六臂の図像によると、憤怒と火の中に存在していたことが分かる。頭髮は逆立ち、頭飾りに五連の髑髏、普通首の飾りとした物は黒蛇で、この図像の違いは全く似てないネックレスの飾りであること、一番左下の手の持ち物が紐であり、両端の部分に金剛と似たような物と釣り鉤に似たような物がある。

しかし、像皮の関係については不明である。笹間氏は次のように述べる。

十八世紀に描かれた大画で、一面三目六臂、これは凄まじい迫力で背後には火焰が渦巻いている。虎の皮を腰に巻き、人頭の数珠を長々とかけ、象を踏み、両手で象の皮をはお

9) (原文アルファベット表記) Bstn bai nyi ma [yi dma rgy mtsoai sgrub thbs rin chen abyung kṣa kyilhn rin abyung don kṣa] bkr shi lhun kyī br gang ཀུལ་ལོར་ br skrun hdz shog ngos ལྷོག་མགོ་ 注訳：テンベニマ【イダム修業の宝源】タシリンポ寺印刷所 1974年、384頁。テンベニマ(1782-1852)はチベット仏教の第二人物者パチャンパ7世の活仏であり、ラサ市ジカシ県のタシリンポ寺院の仏教指導者。宗派はギュル一派であった。テンベニマに関する重要文献は『タシリンポ寺密教グユメ寺の伝説』と『テンベニの伝記』、蔵漢訳の『テンベニマ文集』などがある。經典の書名訳は筆者による。説明し安い立場から考え、チベット仏教用語により、ぴったり合わせない場合もある。例え：イダム = yi dma 海洋 = rgy matso 事例。修業 = sgrub ths 宝物 = rin chen 事例。起源 = abyung gnas 事例の起源。書物 = lhn thbs 明解 = don kṣa などである。

ろうとしている。髪の毛は燃えるように逆立ち、幾匹かの蛇が這い廻り、五つの髑髏の冠をつけ、胸の所で剪刀髑髏盃を持っている、そして象皮をまとった右手に髑髏を連ねた輪、左手は髑髏の付いた三叉戟を持つ。見る者をして恐れさせるに足る画像で、とても福神と言う感じはなく、殺伐な戦闘神であるように見える<sup>10)</sup>。

『三百図像集』に収められている図像については、図像自体は曖昧であるが、手図の順番は木版と同じで、右の持ち物は金剛の刀と髑髏の数珠、デンデン太鼓である。左の手持ち物は血まみれの髑髏、三叉戟、金剛の紐である。左側に野生のロバに乗った吉祥天がある<sup>11)</sup>。十八世紀に描かれた大画では像皮を持っていたコンボ（大黒）があったことが確定し、描いていたのは一面三眼六臂で間違いはない。次に像皮の部分を中心にチベット語の大蔵経中の『rgyud』の「大黒の修業」を論じていく。大蔵経中の『rgyud』の「大黒の修業について」は龍樹菩薩の作品といわれ、翻訳者ブジュサンバ氏 (pn Ditabum phrg gsum pa) と僧侶デンマジウ氏 (dge slong drma grgs) によってチベット語に訳されている。『大蔵経』の經典によると次のようである。

四面六臂（十二眼）は右面が白と、左面が赤色。後ろはライオンのような緑面で、正面が黒く、持物は金剛の刀 (gri gug)、血まみれの髑髏 (thod pa khrig gis bkng ba adzin pa) である。真ん中の両手に棒 (dbyug to) と像皮 (glaing po cheai pgs) を持つ。三番下の手に金槌と紐を持つ<sup>12)</sup>。

ほかに、黒コンボ四面六臂と象皮について、①『蔵伝仏教神明大全』の図像と②『三百図像集』の図像、③『蔵伝仏教本尊大全』のカラー図像など比較していく。①によると四面六臂（十二眼）「刀と血まみれの髑髏を持ち、右の二人手が棒と金槌。左両手が像皮と金剛の紐を持つところであった」<sup>13)</sup>とある。②によると四面六臂の憤怒尊であり、根本の形が黒と閻魔のように憤怒の姿と、右が白像のような憤怒であり、左は羅刹のような憤怒で赤色。背はライオンのような憤怒で緑である。手に持つ物はチベット『蔵伝仏教神明大全』の四面六臂と一致している。③『蔵伝仏教本尊大全』はカラー図像見ると、火の中に存在し、神体は全身が黒く、頭だけ色が異なる。金色の頭髮が逆たちと左の手に像皮を持っていることがはっきりわかった。不明なのは、周辺に四つの女神があったが、『蔵伝仏教神明大全』によると四人の娘だったようである。この四人の娘の色も異なる。この中で、田中公明氏と笹間良彦氏はコンボ一面三眼六臂の図像解釈

10) 笹間良彦『大黒天信仰と俗信』学術専門書籍出版社、1993年、66頁。

11) 当増扎西『宝源三百図解』大黒天賛、北京民族出版社、2007年6月、389頁。

12) 丹珠児（署名）、大蔵経14巻所収『rgyud』より、中国蔵学出版社出版 1996年、1366頁。

13) 前掲注6、1014頁の図像分析。



を論じ、チベットの灌頂を受けた五つの黒コンボ一面三眼六臂は像皮を持った、とするが、その姿は見つからなかった。また、四面六臂は九種類あるが、ガネーシャを踏んでいたコンボ四面六臂はない。しかし像皮をと持った黒コンボ四面六臂はあった。これらは今後調査を進める予定である。ここで大蔵經の黒コンボ一面三眼六臂の姿を確認する。「大黒の修業加持」には次のようにある。

虎皮がスカートとなり、六臂は蛇の飾りをつけ、右手に数珠、真ん中に刀を持ち、一番下にはデンデン太鼓を激しく鳴らす。左は髑髏と三叉戟があり、下には紐を持つ、憤怒の形である<sup>14)</sup>。

つまり、チベット現在の文献には黒コンボ一面三眼六臂が像皮を持っていないことは分かる。しかしながら、黒コンボ四面六臂（十二眼）が像皮を持っている記載が『大蔵經』にもある。

#### 4. コンボ一面三目六臂の伝承

チベットコンボ一面三目六臂がギョルー派の護法尊であったことは上述した内容から明らかである。そしてどのような宗派でも一族的な宗派の門流がある。チベット語では (choes brgyud) と書き、日本語の伝承と同じである。コンボ一面三目六臂の伝承については『蔵伝仏教神明大全』によるとコンボ一面三目六臂の伝承はコンボの十三灌頂を直した書物が、ヒヤデンシャワリーアンシュ (dpa ldn sh wri dbngg) からラヒイラー (rahula) とサラハ (saraha)、ドウジチャン (rdor rje achng)、ヌグーマ (nu gu ma) など門流一族の灌頂をチベット人のチュンプ (khyung bo) が受けて発展したという記載がある。

#### 5. 黒コンボとガネーシャの関係

チベット黒コンボがガネーシャ踏みつける図像は多い。このガネーシャはチベット語で (stoks bdg) と呼ばれ、もともとヒンドウ教のシヴァと深い関係を持つ神であった。現在のチベットでもお寺の門と寺院の壁にガネーシャのタンカ（画像）を見ると、誰もが分かるはずである。チベット人にもガネーシャの信仰があり、種類もいくつかあり、宗派の門流によって異なる。日本では聖天と相対した神と同じで、同じ地域の伝播によって神格と効能も様々である。そこで各国と各民族の宗教に存在するガネーシャの名前から検討する。これらについて佐藤氏は次のように述べる。

聖天は実はいろいろな沢山の名称を持っている。聖天梵語をナンディケーシュヴァラ

14) 前掲注12、1638頁。



図4 久美卻吉多傑『藏伝仏教神明大全』青海民族出版社、2001年、1066頁。

(nandikesvsvara) 難提自在天) という。それはシヴァ神の眷属(侍者)の一つの名前を意味している。しかし、もっと普通に用いられている名称はガナパティ(Ganapati)またはガネーシャ(Ganesa)、およびヴィナーヤカ(vinayaka)である。ガナパティは漢訳では俄那鉢底、俄那簸底、迦那鉢底などと書き表されているが、ガネーシャは普通に誡尼沙と書かれ、ヴィナーヤカは毘那耶迦、毘那夜迦、裨那夜迦、頻那夜迦など多くのあて字で記されている。それはまたヴィグナナーヤカ(vighnayaka)、ヴィグネーシュヴァラ(vighnesvara)ともいう。その文字の意味するところからは、ガナパティとガネーシャはガナ(gana 集団・衆)のパティ(pati 主)またはイーシャ(isa 神)から衆主とも訳されている。つまり集団の主人のことである<sup>15)</sup>。

このように「シヴァ」の名称から来た神もいくつかあったことが分かる。そこでチベット語のガネーシャ(tshogs bdg)の意味は、前半部分 tshogs は集団・衆を指し、後半部分の bdg は主を指す。意味から一致していることも分かる。また、チベットでは一般的にガネーシャ(tshogs bdg)という呼称であるが、細かく調べると、大赤ガネーシャと白ガネーシャ(アティーシャの伝承)、黄色ガネーシャなど、様子、持つ物、伝播と修業も異なるところが多い。ここでは、黒コンポが踏んでいるガネーシャを中心に検討していく。ガネーシャについては次のように説明される。

神体は白で三面六臂支四の足、正面は像の頭と右面は鼠、左面が猿であった。手に持つ物は右、金剛と大根、刀。左は餅、酒壺、槍などであった。前の両足は交差され、後ろの両足が伸ばされた形である<sup>16)</sup>。

このように、黒コンポー一面六臂が踏みつけたガネーシャと異なっているのが分かる。黒コンポの台座になったのは一面二臂であるが、引用したガネーシャの形は三面六臂四足で、黒コンポを踏みつけたガネーシャと異なることが証明できる。ところが、ガネーシャの体色は伝承から白だと分かる。アティーシャから伝わって来た記載とはほぼ一致している。アティーシャにつ

15) 佐藤任『密教の神々—その文化史的考察—』東京印書館、2009年、166頁。

16) 前掲注6、1066頁。

いては次のように説明される。

白ガネーシャアティーシャの伝承は、蓮の上に白ガネーシャあて、右の二人手に大根と数珠。左の二人手に鼠と槍。虎の皮がコートとスカート。鼻が赤くて左足が伸ばしながら、右の足が引いている形である<sup>17)</sup>。

このようにこの白ガネーシャはアティーシャの伝承だったことが分かる。四つの肩を持つことは黒コンボの台座と異なっていることも分かる。また別の資料には次のように説明される。

ガネーシャはインド起源の象頭の神で、シヴァとパールヴァティーのあいだの子供としても知られている。インドでは単独で表されることも多く、財宝神や学門の神として広く親しまれている。日本では聖天がガネーシャに相当するが、像の頭という奇怪さや、男尊と女尊が抱き合うポーズのいわゆる歓喜仏であることも多いため、秘仏として一般



図5 『もうひとつの大谷探検図隊チベットの仏教世界』  
龍谷大学龍谷ミュージアム 52頁より

の眼に触れないことも多い。この作品はガネーシャが横たわった姿にしているが、これは、マハーカーラの台座として製作されたためと思われる。同じような姿勢で、上にマハーカーラを乗せた作品が数多く残されている。ただし、本作品にはマハーカーラを固定するための臍穴がないため、上にマハーカーラを乗せる前に、未完成のまま放置されたことが予想される。あるいは、どこか恨めしげに見つめるガネーシャに、遠慮したのであろうか<sup>18)</sup>。

このように、これは東チベット18世紀の銅像であり、日本の聖天との関係も一部触れられている。筆者はこの図像の様子と、手に持つ物を黒コンボ台座と比較した。左手の大根は地球の中心を示す。右の壺は宝を齎していることが分かる。そこはチベット語の原語と一致した。また、この図像は財神と学門の神をとして信仰されたこともよく分かる。ところがチベットでは

17) 前掲注6、1065頁。

18) 『チベットの仏教世界 もうひとつの大谷探検隊』龍谷ミュージアム2014年、52頁。

黒コンボは障害を取り除く神として信仰されている。この点について書かれた物は少ない。チベットコンボの仏像にはさまざまな台座が描かれ、効能と意義を示すものが異なり、乗せる目的と踏みつける意義によって効能が強まる。さらに、黒コンボが障害を除く神として信仰されていた事と、ガネーシャの効能が一致していることを検討していく。その効果については次のように説明される。

ヴィナーヤカは「除去、指導者、障害」などの意味をもつが、にはヴィグナ (vighna 破壊者・障害者) という言葉で用いられ、ガネーシャの別名とされる。通常は障礙神で、その面でいろいろな名称をもっている。ところが、奇妙なことにはヴィナーヤカは障害の主と、障害の除去者という際立った二つの相対立する側面を自身の名前としてもっている。障害の主としては、例えばヴィグナナーヤカ、ヴィグネーシュヴァラ、ヴィグナパティ (vighnapati)、ヴィグナラージャ (vighnaraja)、ヴィグネーシャ (vighnesa) などである。障害の除去者としてはヴィグナナーヤカ (vighnasaka)、ヴィグナナーシャナ (vighnasana)、ヴィグナヴィナーヤカ (vighnavinayaka) などである。しかもこれらはいずれもガネーシャ即ちガナパティの別名であるとされている<sup>19)</sup>。

つまり、障害を取り除く神はいくつもあったことが証明できる。主に名称の意義では「除去、指導者、障害」の効能と「破壊者・障害者」二つ効能から指導者という面と破壊者という面の区別があると分かる。ガネーシャにも障礙神とはっきり書いている。また、

ガネーシャはヴィナーヤカ VINAYAKA (障害を除く者) または「障害となる者」とよばれる。しかるべく崇められた時、この神は「障害を取り除いてくれる神」ともなる。このような二面性はほとんどの神格に存する<sup>20)</sup>。

というように述べられてもいる。このように、上記に示した文献と図像、銅像からも、チベット黒コンボを踏みつけるガネーシャの様子は、白い体色であり、左手に大根を持ち、右手に壺を持っているところ同じであると分かる。

## 6. 黒コンボ一面三眼六臂の称賛

チベットにはさまざまなコンボがあり、宗門や寺院の守護神として、マハーカーラを祀るお寺は多く、宗派や門流によって独自のスタイルのマハーカーラを崇拝しているケースも見られ

---

19) 前掲注16、167頁。

20) 立川武蔵『ヒンドゥー神話の神々』せりか書房 2008年3月、218頁。

る<sup>21)</sup>。独特な宗派の門流によって称賛と梵語も異なっている。ここからは、黒コンポ一面三眼六臂の称賛について論じる。この称賛儀式はいつ頃から行われた儀式であるかは不明だが、チベットの日常生活に根付き、特に祝日には山やお寺で行うことが多い。その内容はラマ（高僧）により書かれた物である。コンポによって称賛の内容は全く異なる。以下は、コンポの賞賛部分である。

Chosa dabyingsa ngnglas ma kyaogaks kamyi	法界を清めずに修習することと
kadauka ba Ldaula phyirkh baiskau	魔を鎮撫するために激怒する様子であり
bastn baairutar ajaomas bai	羅刹の障害に打ち勝つため
nak bochepayka atsl bstod <sup>22)</sup>	黒コンポ一面三眼六臂を帰依させる

訳：内容は法界を清めずに修習することと、全ての悪魔を調伏するために憤怒する様子であり羅刹の障害に打ち勝つため、黒コンポ一面三眼六臂に帰依させる。

以上の称賛についてはタラナタ文集でも書かれており、違っている部分は一段目の ma gyogs = kyos 部分と二段目の gdug ba adula = marungsadula である。チベット語の内容はほぼ同じだが、なぜ二つの言い方なのかは不明である。

## 7. 黒コンポに帰依する時の梵語

Snggas :

aoma du yag daza mahakara tar krsh hauha pgasa (tsnba)

梵語：アムディヤッジャ・マハーカーラジャダインペ。

(チベットに残ったサンスクリット語)<sup>23)</sup>。

上の言葉は、サンスクリット語のチベット語による発音をそのまま表記したものである。内容と発音が一致する個所もあったため、その発音を日本語で表記した。

## 二、白コンポ一面六臂

### 1. 白コンポ一面三眼六臂の神格

チベットには一面三眼六臂の白コンポがある。この白コンポは心の宝を護る神であり、様々な種類のチベットコンポの中で唯一の種類とされる。日本に伝来した大黒天とくらべると、神の神体や神格は同様でないが、表情だけが一致する。そして手に持つ物に関しては他のコンポ（大黒）と違う点も見られる。白一面三眼六臂コンポ（大白）は、コンポ全体から見ると優しい

21) 田中公明『チベットの仏たち』方丈堂出版。2009年10月、225頁。

22) 当増扎西『宝源三百図解』大黒天賛、北京民族出版社、2007年6月、393頁。

23) 注3前掲、久美卻吉多傑2004年、589頁。

表情が特徴的なコンボ（大白）である。チベットには財神として信仰されることが多い。もともと財神として信仰される神は多く、毘沙門天も財神とされる。他にも財神とされる神として「ザーバラ（dzambh la）があり、全部で十五種類の姿がある。この十五種類のザーバラの中にも白い財神の姿は見られる。そしてこのザーバラも憤怒相に一面三眼二臂であり、ライオンに乗る姿である。しかし、これは財神であって、コンボ（大黒）とは関係がない。今回は筆者がチベット白コンボ一面三眼六臂を宗派ごとに歴史を比較しながら進めていく。白コンボについては次のように説明される。

白色如意宝珠マハーカーラはシャン派の祖キェンポ・ネンジョルにまで遡るインド伝来の図像とされますが、実際には十四～十五世紀にまで上げられる作例はほとんど見られません。ハンビッツ文化財団には、十五世紀にまで遡る白色マハーカーラの図像の中でも、もっともポピュラーな物の一つとなっています。また他のマハーカーラでは、憤怒尊の威力を強調するため、ナクタン（黒タンカ）の作例が多数製作されましたが、白色如意宝珠マハーカーラでは、福神としての性格を強調するため、マルタン（赤タンカ）の作例も多く見られます<sup>24)</sup>。



図6 久美卻吉多傑『藏伝仏神明大全』漢語版 青海民族出版社、591頁。

白コンボ一面三眼六臂はチベットコンボの種類の中で、財神とされていることは一致し、このタンカ以外に黒タンカと赤タンカもあったことが理解できる。黒タンカは先に述べた黒コンボ一面三眼六臂であり、僧侶の作品だったことは分かりやすい。そこでシャン派とキェンポ・ネンジョル氏のことから述べる。シャンパ派とはチベット四大宗派、カギュー派の第二支派のなかの一つである。『ナロ六法』<sup>25)</sup>を重要視したとされ、次のように説明される。

論じた四つの論述に向かえた祖先たちの伝承に繋がる修行であり、四つの論述を獲得した僧侶テローパからナローパ、ムバとミラレパ、ニャンメデーポからデーポ派とシャンパ派二つに分かれ、ニャンメデーポ氏の生徒キェンポ・ネンジョル（990～1140）氏とキャジ

24) 田中公明『チベットの仏たち』方丈堂出版。2009年10月、238～239頁。

25) ヒンドゥーのベンチナーナローパから伝わって来た經典である。六つの論述した教戒で、最も重要な輪廻転生も一部になる。

ヨマ氏が引き継いだのはシャンパ派である。<sup>26)</sup>

また、ツォブ寺と二ナン寺、シーシャ寺などにも図像はあるはずである。しかし、白コンボの図像の上には普段龍樹菩薩の図像があり、なぜか全てのコンボ伝承は龍樹菩薩から始まったという説もある。清代の白コンボの図像の上に龍樹菩薩とダライラマー世とアティーシャ尊者、吉祥天と黒コンボなどが一つの図像に見られることが多いので、ギュルー派とも関係あるとも考えられる<sup>27)</sup>。そこでまず、白コンボ一面三眼六臂の神格を検討していく。神格の漢語訳を以下に示す。

膚色白，壳面六臂，三只慧眼，須髻黄褐卷曲；右手壳執弯刀，中手執宝自在王，下手執紫檀鼓；左壳手執装有宝瓶的甘露鬘骨置于左大腿之上，中手執三股矛，下手執羂索；織綿款款，虎皮為裙，橡皮肩陂，五頂骨為冠，五十只鮮頂骨為瓔珞；以行步式住于蓮花日輪獅子座，周圍由无数空行簇擁<sup>28)</sup>。

漢文訳では、智慧により徳を護る護法尊として崇敬されるコンボに、白一三眼面六臂の大白がいる。チベット語ではコンケイ「mgon dkar」と読み、忿怒の形相に三眼であるが、資料の記載には笑顔と書かれることも多い。色は白く一面六臂の姿である。このコンボの特長は、色が異なるだけでなく、有する力も違う。チベットでは心の宝を護る神とされるが、この宝が財神或いは智慧の神であるかは判断に迷うこともある。像の形相は忿怒、髪は怒髪である。頭には五連の鬘の飾りがある。一番右の手に刀を持ち、一番左の手を高く掲げ槍を握る。二番目の右手にダルマ（デンデン太鼓）を持ち激しく打ち鳴らす。二番目の左手に金剛の紐を持ち、三番目の右手に宝を示す物を持ち、三番の左手には壺があり、中には宝があるという説がある。チベットのコンボ（大黒）が乗る台座も三種類ある。この白い一面六臂のコンボ（大白）は、両足でガネーシャを踏みつける。装飾として「虎の皮のスカートと象の皮でつくられたコート」をまとい、鬘を頭に飾



図7 田中公明『チベットの仏たち』  
方丈堂出版、2009年10月、239頁。

26) タシツェラン『蔵区地理与人文』甘肅民族出版社 2008年、303～304頁。

27) 若布旺典『世界最美唐卡』紫禁城出版社 2009年8月、126頁。

28) 注1 前掲、久美卻吉多傑、2001年、591頁。

る<sup>29)</sup>。日本の財神にある大黒天と全く異なる点として、手に鼠がなく、小槌も持たないが、笑顔は同じである。白コンボの様子と飾り、手に持つ物については漢訳のようである。

白色如意宝珠マハーカーラは身色白色、頭髮は逆立ち、二体の象頭の神ガネーシャの上に直立してます。右の第一手はカルトリ（曲刀）を高く振り上げ、第二手は胸前で如意宝珠を執り、第三手はダマル（デンデン太鼓のような楽器）を持ちます。いっぽう左の第一手は臍前で宝を満たしたカパーラ（鬚髯杯）を持ち、第二手は三叉戟、第三手は鉤を持っています。この図像は、右手にカルトリ、左手にカパーラを持つマハーカーラの二臂に、四臂を付加したものですが、実際には如意宝珠を持つ右の第二手が重要手のように描かれます。なお左の第三手は、鉤を持つ物ほかに、素を持つ図像もあります。『リンジュン』によると、この図像は、カギュー派の一派シャン派を開いたキュンポ・ネンジョル由来するとされています。他のマハーカーラと同じく、虎皮の褌をまとい、右の第一手と左の第二手で像の皮を上げるとされますが、これらの規定は、実際の作例では、しばしば守られていません。また、装身具や台座などに豪華な装飾を施し、福神の性格を強調した作例も多くみられます<sup>30)</sup>。



図8 東チベット18世紀 銅板打出鍍金 像高19.3cm 北村コレクション（『もうひとつの大谷探検図隊チベットの仏教世界』龍谷大学 龍谷ミュージアム 52頁。）より

この内容を見ると、その神格から、白コンボ一面六臂は財神として信仰されていたとわかり、さらにほかの資料からみても財神であることが分かる。漢文訳の手姿順番は田中氏の手姿順番と異なっている。チベット語の『蔵伝仏教神明大全』原本と比較し、『宝源三百図解』とも検討した結果、神格の手の順番は漢文訳が違っていることが分かった。田中氏と若布旺典氏のチベット白コンボの手に持つ物は同様であった。しかし『蔵伝仏教神明大全』にある白コンボの左下の手の持ち物は紐であり田中氏によると「左の第三手は、鉤を持つ物のほかに、素を持つ図像もあります。」とある。そこで以下にいくつかのチベット木版の内容と比較し、論じる。

29) Blo bzng narbu 『yi dm rky htsoai skrub thbs rin chen abyng kns』 bkr shis lhun poai pr khng pod khrngs knyis paṅṅṅ, ལེ་ལོ་ལོ་ལོ་。ロゼロヌウ『護法尊の修法』タシリンボウ寺木版、406-426頁を要約した。

30) 田中公明『チベットの仏たち』方丈堂出版、2009年、238頁



訳文：神体の色は白、笑顔で三眼を持つ。髭と髪は黄色の怒髪である。頭には五連の髑髏の飾りがある。一番右の手に刀を高持ち、宝を示す物を胸部の中心に持ち、三番はダルマ（デンデン太鼓）を鳴らす。一番左手には壺があり、中には宝がある。左の手を高く掲げ槍を握る。二番目の左手に三叉戟をもち、三番は金剛の紐を持つ。走装飾としてネーシャを踏みつけ、二つのガネーシャの手持ち物は大根形のものゝ鼠であった。また虎のスカートと象の皮でつくられたコートをもとう<sup>31)</sup>。ロサンニマ僧の「白コンポの修行」によると、白コンポ一面六臂は半怒本半優の形で右の一番の手に刀を激しく上に上げる様子、二番の手に宝の壺を持つ、胸の真ではデンデン太鼓を鳴らす。左の一番の手に髑髏の壺似たような形を持ち左の二番は叉戟と左の番の手に鉤を持っている<sup>32)</sup>。

以上の結果、白コンポの神格には一番左の手持ち物は二種類があったことがわかった。主に白色如意宝珠マハーカールは18世紀の同像には何にも持っていないという記録もある。以下に東チベットで見つかった銅像一面六臂の姿を分析していく。

マハーカーラはチベット仏教で最もポピュラーな護法尊である。マハーカーラは「大いなる黒きもの」を意味し、その名のように、体全体が黒く表されるのが本来の姿である。これに対し、体の色が白いマハーカーラが、時代が下ると現れるようになる。これが白如意マハーカーラで、六本の腕を持ち、直立した姿勢で表されている。本作品は手に持つ物が失われているが、体の左右に広げる手の右側にはカルトリ（半月形の肉切り包丁）とダマル（デンデン太鼓に似た楽器）、左側には三叉戟と鉤をもち、体の前にかまえる中心の手には、右手に如意宝珠、左手に宝を満したカパーラ（髑髏杯）を持つのが一般的である。最後の二つの持ち物は、通常のマハーカーラには見られない物で、この仏が単に憤怒を示すだけでなく、財宝をつかさどることと関係する。寺院の守護尊として広く信奉され、特にモンゴルで信仰を集めた<sup>33)</sup>。

これを見る限り、白如意マハーカーラの神格と、手持ち物に対しては非常に珍しいことがわかった。18世紀の物の場合、白コンボの本体は、ほぼ同じで姿あったが、宗派の伝承によって白如意マハーカーラの周辺にあった神が異なっていたこともよく見られる。以下の図像から説

31) Blao bzng nor bu she rb chings su tsug thu no mon hn Blao bzng nor bu she rb khngabum pec  
in par khng གཤམ་གྱིས་བྲོ་ལོ་རྒྱུ་ལྟོག་པའི་ཆོས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཕྱིན་ཆོས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཕྱིན་ཆོས་ རེ་  
印刷所1996ロセンノーレシェレーさん（1677-1737）はGanden shedrubTenpelungの僧員で、外モンゴル  
のバードと言われ、この人物に関する資料は蔵漢二語に訳された『ロセンノーレシェレー氏の文集』がある。

32) ロサンニマ僧 (1737~1802)「白コンボ一面六臂の修業について」ロサンニマ文集、タシリンボ寺印刷所 231頁。(ケンプ寺とゴンロン寺、シャリ寺、シャチョン寺)などに〈高僧〉カムボとして教えた。

33) 『チベットの仏教世界 もうひとつの大谷探検隊』、龍谷ミュージアム、2014、52頁。

明をする。

主尊は六臂の白大黒天であり、一面六臂、体色は白、面相平和。この図像の特徴的なところは珠寶の部分と、図像の後ろにある火の上の珠寶である。図像の下にも散らかった珠寶があり、図像の週辺にあったダキニーと、ダキニーの持っていた珠寶などは独特な財神とされている。ほかの図像に対して白大コンボ（黒天）は全ての黒天の中でも人気の護法尊のひとつであり、全身は白、一面六臂、面相は微怒、頭に宝冠を飾る。蓮の上の両足がガネーシャを踏みつける。四辺に様々な珠寶があり、図像の左上には龍樹菩薩とタシリンボ寺創造者ダライラマー世マンダラがある。右の上に黒天修業に成職者沙瓦熱巴とカダム派創造者アティーシャ僧があり、図像の上と下に黒コンボ一面六臂と吉祥天がある<sup>34)</sup>。

この内容を見ると、二つの白コンボの模様が一致である。特別なところは周辺の神が違うところは図像にも見える。18世紀の周辺に五つのダキニーがあり、体色が、白、青、緑、赤、黄などですべてダキニーの左手に如意宝持つところが特徴である。二番の白コンボの周辺には龍樹菩薩の図像が示した原因は龍樹菩薩の伝承から伝わった記載があり、それについて以下に検討していく。



図9 若布旺典『世界最美唐卡』紫禁城出版社 2009年8月。117と126頁。右は18世紀アメリカルビン美術館蔵。左は六臂白コンボ 布本設色唐卡 16世紀清朝西藏

34) 若布旺典『世界最美唐卡』紫禁城出版社 2009年8月。126頁。

白コンポの伝承については、ドウジチャン (dor rje achng) から、シャワーリ (Shri b) とメジィワ (Metrib)。又、ドウジチェアダヤヴァザー (Atybzah)、ダヒュラ (dhula)、チュンブ (khyung po)、モウジュパ (rmogljzha) とチュサン (chosseng<sup>35</sup>)、ジグユンパ (skyes sgng b)、ニドンチェンポ (gnyn ston chen po) などの30人のラマの灌頂がある<sup>35)</sup>。

引用の内容より、白コンポの伝承の人物は龍樹菩薩だといわれている。白コンポはいくつかの種類があるので、各宗派の門流によって違うのではないかと考える。

## 2. 白コンポとガネーシャの関係

チベットの白コンポは財神として信仰されていたことは以上の論述でも書いた。白コンポ一面六臂の台座はチベットの五つコンポのなかでも唯一である。両足の下にガネーシャを二つ踏んでいる様子は良くみられる。今回は白コンポとガネーシャの関係を中心に検討していく。その関係については次のように説明される。

ラマとコンポを同じように帰依する。白コンポの修業により、重要な礼拝の対象とし、供養と共に自身のイダム二つの種類（憤怒相と寂靜相）に禪定された供物と供え方の加持として、ペン (bm) は蓮を示す。ラム (rm) は太陽の曼荼羅を示す。その上に白ガネーシャ二つ、手に持つ物は右、髑髏壺と左は葉っぱを持ち、大根と鼠<sup>36)</sup> に似たような動物を持つ姿で、鼠の口に宝を吐くことができる。その二つの上に白コンポがある<sup>37)</sup>。

ここで、白コンポを踏みつけたガネーシャは二つあったことが分かる。そして、二つのガネーシャの体色は白であり、持つ物は壺と葉っぱ、大根と鼠だったことも述べられている。チベットコンポには鼠を持つ図像は今のところは見つけれないが、鼠と大黒（コンポ）の関係は日本にもあった。そのことについては以下のように述べられている。

福島県須賀市・郡山市・福島市のものはいわゆる大黒帽という頭巾を被り、二つの俵をふまえた極めて典型的なものであるが、強いてその間に異を求められれば、俵の結び目が写実的な縄の結び方を示したものと、そこを単なる茶吉尼天の宝珠で表現したものの二種がある。また、群馬県では吾妻郡長野原町横壁の諏訪神社の物は、踏みつけた俵は一つでそ

35) 当増扎西『宝源三百図解』「大黒天伝承」、北京民族出版社、2007年6月、399頁。

36) チベット語で (neau le) である。鼠と違う動物。(Sre mong) の名称もあり、鼠と似たような動物で物語では口から宝を吐く動物である。チベット語の直訳と鼯と同様だった。

37) ソナムジャツォ『ソマナジャツォ文集』「白コンポの修業」ラサ古書文集館 2009年。1頁。ソナムジャツォ (1543～1588) グライラマ3世。

の両脇に薪束（または経巻の束とも見られる）を置き、台座に大根と鼠を彫り、その下に子待供養塔とあり、文化元年（一八〇四）のものである。<sup>38)</sup>



図10 久美卻吉多傑『蔵伝仏教神明大全』  
青海民族版社、2001年、(1068) 頁。

こうした仏像の中に大黒（コンボ）と鼠と大根との共通点が証明できる。チベットにも鼠に似たような動物もつ図像が多い。ジャンパラ（財神）と毘沙門天、ガネーシャなどもある。以下に鼠に似たような動物とガネーシャについて比較していく。その関係については次のように説明される。

アティーシャの伝承には、白ガネーシャ、三眼四肩の持つ物は、右に紐と大根。左に鼠（イタチ）と槍（三叉）。青い鼠に載る姿である。とあり、ドウジチャンの伝承には赤ガネーシャ四肩、持つ物は右、紐と大根。左は鼠（イタチ）と槍（三叉）、青い鼠に載る姿である。<sup>39)</sup>

このように、チベットで信仰されるガネーシャは、唯一の四肩像であることが分かる。そして、白コンボを踏みつけたガネーシャとチベットのガネーシャは別のガネーシャであることを明らかにした。ここでガネーシャが鼠に乗ことを中心に論じていく。図像参照ガネーシャすなわちガナパティは身体の形態からつけたいくつかの名前をもっている。それはランボーダラ (lambodara 長腹・垂れ下がった腹をもてるもの) ランバカルナ (lambakarna 長耳・長い耳を持てる物)、エーカダンシュラ (ekadanstra 一牙・一本の歯牙をもてるもの)、ドウヴィデーハ (Dvideha 双身・二体のもの) などがある。また、アーク・ラタ (Akhu ratha) 騎鼠・鼠に乗る物) という名称もある。これの名称から、ガネーシャがどのような姿態をした神像であるかを想像することができる<sup>40)</sup>。

ここから、チベットの白ガネーシャと青ガネーシャの姿はアーク・ラタという名称から伝わって来た可能性が高い。そして、「アーク・ラタ (Akhu ratha) 騎鼠・鼠に乗る物) という名称もある。」内容からヒンドウ教にも鼠に載ったガネーシャがあったことが分かる。財神白コンボの効能とも一致し、持つ物、鼠（イタチ）が宝を吐く特徴から考えても、財神を示すものではないだろうか。

38) 大島建彦編『大黒信仰』（民間宗教史叢書29巻）、雄山閣、2007、147-148頁

39) 前掲注6、(1068-1071) 頁の図像解釈。

40) 前掲注16、171-172頁。

### 3. 白コンポの称賛は以下のように書かれている。日本語の訳文は筆者による。

mgon boyida bzhin norbu thugs rje cna	白コンポは如宝意の形で表す
skau mdog kngs ri ltr dkr aod zer apro	顔色は白くて雪山のようであり
agro bai dbul apongs ma lus zhi mdzd ba	生き物の貧しい事を救済し
adod dguai dngos krub stsol la pyk atsh bstod <sup>41)</sup>	欲求を満たすために帰依する。

### 4. 白コンポに帰依する時の梵語

Snggas:

aom guru mahakala ha ri nisrb sidnghai dz<sup>42)</sup>。

梵語：アムグル・マハーカーラ・ハリヌスウバースーダジャ。

### 5. チベット黒コンポー一面六臂と白コンポー一面六臂の神格

コンポの系統	効能	持ち物	台座	梵語
黒一面六臂のコンポ	障害神	金剛、髑髏、数珠、ダマル、金剛の紐。	ガネーシャ	アムディヤッジャ・マハーカーラ ジャダインベ
Mgon po phyg drugBr ched kun sel	Brwchd kun sel	Gri gug todpa phreng b Dmru mdung rzaekgsum pa	Thogs bdg	aoma du yag daza mahakara tar krsh hauha pgasa (tsnba)
白一面六臂のコンポ	財神	刀、槍、太鼓、金剛の紐、壺。	両足にガネー ーシャ	アムグル・マハーカーラ・ハリヌ スウバースーダジャ
Mgon dkr yid bshin nor ngo	Nor bdg	Gru gu rzare hgsum Nor bu kpa l buh pa	Thogs bdg knyis	aom guru mahakala ha ri nisrb sidnghai dz

## おわりに

本稿ではチベットのコンポの灌頂を与えた黒コンポー一面六臂と白コンポー一面六臂を中心に文献を集め、チベット語の経典「大黒の伝承」magaonbaeirgayud、「大黒の灌頂」magaonbaeikzaugas、「大黒の修業」magaonbaisagrubasthbs、「護法尊における大黒」chosskayogamamgaonbaoなどを調べた。チベットの五つ種類のコンポ中の体の色は黒・白・赤・黄・緑がある。この色は各コンポの神格を僧に示す働きがある。以上を前提とし、神格の順位にしたがって、コンポの神格を中心に各寺院の経典資料を使って、さまざまな図像と対照し、効用、変容、手の飾りと持ち物について論じたものである。さらに梵語と経典におけるコンポに対する称賛などについてもふれた。

41) 注5 前掲、395頁。

42) 注3 前掲、久美卻吉多傑2004年、591頁。

日本側の参考資料は田中公明『チベットの仏たち』と笹間良彦『大黒天信仰と俗信』を取り上げ、大黒の経典と図像を調べ、一致しない部分に関して、他の文献と比較した。またチベット一面六臂の種類の体の色について述べた。チベットには高僧を指すコンボは五種類ある。黒コンボ・白コンボ・黄コンボ・赤コンボ・緑コンボであり、チベット語では「mgon bka dng pao」と読み、これは最上級の灌頂を受け、「mgon bka gnyis ba」は二番目の灌頂を受け、「mgon bka ksum pa」は三番目の灌頂を受け、「mgon bka bzhiba」は四番目の灌頂を受け、「mgon bka lng ba」五番目の灌頂を受けた、またその順番も評定された。この五種類のコンボはチベットの高僧が決めており、その順番も重要であることがわかった。

また、経典資料は各寺院に多くみられる。経典を一つ一つ挙げて比較するのは難しいため、末尾に経典の印刷所と著者、それに関するチベット語を日本語に訳して示した。各コンボの梵語と称賛についても述べた。これは神々を称賛する事によって、その加護を得ようとするものである。コンボの称賛については「中国蔵黒水城漢文文型所見大黒天信仰」「智尊大黒八道讃と大黒讃吉祥大黒八足讃十方護法尊讃」などを参考にし、高僧の通りに、規定に従った称賛一族が伝承してきたことも明らかになった。

チベット黒コンボとガネーシャの関係と白コンボとガネーシャの関係では、チベットのガネーシャ信仰を中心にヒンドゥー教のガネーシャの種類と名称などを調べた上、チベットのガネーシャとヒンドゥー教のガネーシャが相互に深い関係があったことが明らかになった。日本の聖天像とヒンドゥー教の図像交渉も検討し、日本の大黒天の持つ鼠と、チベットのガネーシャが乗せた鼠との関連についても述べた。問題点はチベット語の(sre mong)と鼠の関係、日本の文献には鼠と書いているがチベットには(イタチ)だった。それについては今後の課題としたい。